



私が会長を勤めた頃

11 代会長 山岸 哲 YAMAGISHI Satoshi

私が、鳥学会に関わり始めたころは、学位を取得されていた会員は、山階芳麿、黒田長久、羽田健三、浦本昌紀、中村登流、中村司、森岡弘之、小笠原嵩、久保浩洋、正富宏之、樋口広芳さんなどで、その数の少なさは目を覆わんばかりだった。なにしろ、学位をとると「学会賞」が授与されるほど、研究者が少ない時代だったのである。ちなみに、「学位を取れば学会賞というのは、他の学会ではあり得ないことで、恥ずかしいことではないか」という、森岡弘之さんの提案で、私が学位を取得した時から、「鳥学会賞」は廃止されたいきさつがある。

専門的研究者の数が少ないことのほかに、大学院生の会員がほとんどいないことが学会にとって、大きな問題だったような気がする。その原因のひとつは、先にあげた専門的研究者の皆さんの、どなたも博士課程のある大学に身を置いておられなかったことであろう。鳥専門の指導者がいなければ、大学院生が育たないわけではない。大学院は「論理性」を追求するところであるが、その論理性を追求する「方法」も重要であることは、また事実であり、指導者の経験が効率よく研究を進める助けになることも確かであろう。私の研究成果が、それに値したかどうかは別にして、鳥の研究者として、大阪市立大学理学部において、諸先輩方が果たせなかった、博士課程の学生をもてる幸せを、私は我が国で最初に味わえたのである。1993年から1998年まで、私が会長を勤めさせていただいたのは、そんな時代であった。

会長になって、私が最初にしたことは、自分の大学院生たちに「鳥学会」に入ってもらおうことだった。彼らに入会しない理由を尋ねると、「そんな余分な金はない」ということのほかに、会誌名「鳥」が気に入らないということだった。外国の研究者に「tori」では通じないし、公募に応募した際、評価する鳥類以外の生物学者から「野鳥の会」の会誌と間違えられそうで損をしそうだ、というのだ。

会長としての初仕事は『鳥』から『日本鳥学会誌』への誌名変更だった。「朝日新聞」の科学欄で、「功利的な研究者が、明治以来伝統のある学会誌名を、こざかしく改変した」と非難されたのには、まいったが、「これも時代の流れでしょう」と、同記事の中で黒田先生があきらめのコメントをくださったのが、せめてもの救いであった。

私が、会長として目指したのは、「鳥学会を普通の学会にする」ということだった（それまでは、サロンであり、普通ではなかったと私は思う）。これを最初に手掛けたのが、森岡さんだったと、私は認識している。彼が学会の経済を立て直し、学会としての骨組みを再建したとするならば、私は、それを引き継いで、中身を普通にしたということだろうか。普通にするために私が目指したことは、1) 日本の鳥学の国際化の推進、2) 鳥類生態学以外の研究者との分野間連携（会員のほとんどが生態学・行動学を志向していた）、の二つだった。

国際化のためには、学生に英語の論文を国際誌に投稿してもらった。研究生だった故伊藤信義さんが、研究室のためにと1,000万円の寄付を申し出られたのを、鳥学会に寄付してもらい、これをもとに「伊藤基金」を設立し、若手の研究者を「国際鳥類学会」へ派遣した。さらに、国外から有名な研究者を招聘して、会員との論議の機会をつくった。招かれた主な研究者は生態学関係では、J. R. Krebs, J. L. Brown, A. Zahavi, D. W. Mock, A. P. Møller, G. E. Woolfenden, N. B. Davies など多数に上る。

分野間連携については、石居進、和田勝さんなど、生理学者の協力を得て、学会のシンポジウムで「生態学と生理学の握手」を手始めにやった。その後は、分子生物学、数理統計学などとの連携に発展していったのである。

私が会長だった頃、それは日本鳥学会が大学院生の参画を得て、大きく様変わりし始めた時代だったような気がする。